

2009年夏季の北太平洋におけるサケ資源と海洋環境

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福若, 雅章 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009708

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



2009 年夏季の北太平洋におけるサケ資源と海洋環境

ふくわか まさあき
福若 雅章 (北海道水産研究所 亜寒帯漁業資源部)

はじめに

第二次世界大戦後、日本では北洋海域でのさけ・ます流し網漁業が発展しました。それに伴い、水産庁の水産研究所は北太平洋やベーリング海に分布するさけ・ます *Oncorhynchus* spp. の漁場開発、資源状態、およびその起源について流し網を用いて調査してきました。これらの北洋調査により、日本で生まれたサケ (シロザケ) *O. keta* は北太平洋やベーリング海を広く回遊していることが分かりました (田中ら 1969; Neave ら 1980)。1993 年の「北太平洋における溯河性魚類 (さっかせいぎょい: 海から川にさかのぼって産卵する魚類) の系群の保存のための条約」の発効に伴い公海域でのさけ・ます漁業は禁止されましたが、この条約や国連海洋法条約に基づき日本は日本生まれのさけ・ますからの利益を享受する権利とそれを適切に管理する責任を負うことになりました。水産総合研究センター (以下、水研センター) は、海洋生態系を考慮した日本生まれのサケの適切な管理を目指し、北太平洋やベーリング海に回遊するさけ・ますの資源状態とその環境に関する調査を、北海道大学などのご協力をいただきながら継続しています。ここでは、2009 年の夏季に実施した北太平洋とベーリング海における流し網によるさけ・ます調査結果をご紹介します。

日本系サケの回遊ルートと調査海域

日本生まれのサケは北太平洋を広く回遊し満 2-6 歳で生まれた川に帰ってきます (図 1)。日本の河川に春に放流されたサケ稚魚は、しばらく沿岸で過ごした後、海岸沿いに北上し、オホーツク

海で最初の夏を過ごします (浦和 2000)。その後、秋から冬に北西太平洋へ南下し、春から夏にベーリング海へ北上します。海洋生活 2 年目以降は、夏をベーリング海、冬をアラスカ湾で過ごし、性成熟が始まるとベーリング海から日本の河川に回帰します。

2009 年夏季には若竹丸 (北海道実習船管理局、水研センター用船) がベーリング海と中部北太平洋で、おしよ丸 (北海道大学) がベーリング海と北西太平洋で流し網を用いてさけ・ますの資源状態を調査しました。また、同時期に流し網を用いて中西部北太平洋でアカイカ *Ommastrephes bartramii* の資源状態を調査した開運丸 (青森県産業技術センター、水研センター用船) からさけ・ます混獲データを提供していただきました。これら流し網調査船のほかに北光丸 (水研センター) はベーリング海とチュクチ海 (北極海) でトロール網を用いてさけ・ますの分布と資源状態の調査を行いました。

2009 年夏季の海洋環境

2009 年夏季にはエル・ニーニョ現象がおり、日本では天候が不順であったり、太平洋の赤道付近では表面水温が高かったりと例年とは異なる海洋・気象状態でした (気象庁 2009. <http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elnino/index.html>)。中部北太平洋とベーリング海でも流し網調査点での海の表面は近年の平均より約 1℃低い水温でした。表面水温以外の海洋観測項目については、データを水研センターに持ち帰り、専門の部署で解析中です。

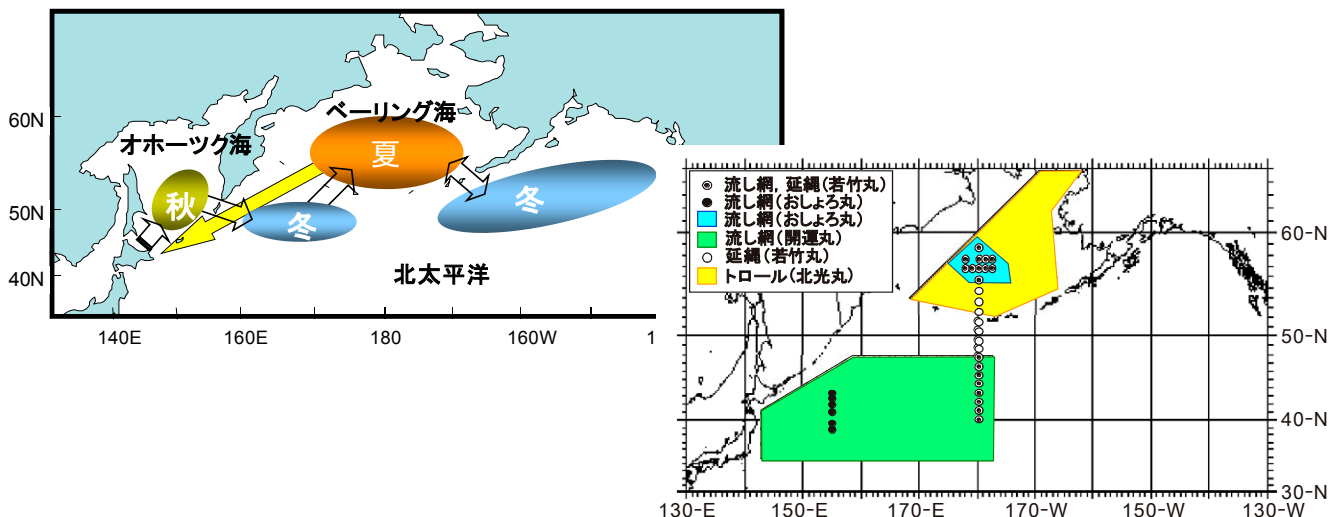


図 1. 日本産サケの北太平洋における回遊ルート (浦和 2000 を改変) と 2009 年の日本のさけ・ます調査船による調査海域図。

サケの資源状態

2009 年夏季にベーリング海でサケの 10 種目合い調査流し網 30 反あたり漁獲尾数（単位努力量あたり漁獲尾数：CPUE）は 45.2 尾で近年（1992-2009 年）中で最低でした（図 2 上）。サケは夏季に主にベーリング海に分布します。ベーリング海でのサケの漁獲尾数は偶数年より奇数年に低くなります。このことは奇数年に資源豊度が高いカラフトマス *O. gorbuscha* と逆の変動となっており、カラフトマスとの競争のためサケは分布を変化させるためと考えられています (Azumaya and Ishida 2000)。そこで、調査海域を中部北太平洋まで拡大し、さらに奇数年の平均値あるいは偶数年からの平均値とどれくらい異なるかを計算したものを図 2 下図に示しました。それによると近年 20 年間の中でも 2009 年は低い水準（平均の 84%）にあるといえます。

また、ベーリング海と中部北太平洋で調査流し網により漁獲されたサケの体サイズの経年変化を見てみると、0.2 歳*から 0.5 歳*魚の体サイズは 1970 年代から 1990 年代中盤までは徐々に小型化していましたが、その後は回復傾向にあります（図 3）。2009 年の 0.2 歳魚の体サイズは、1990 年代以降では比較的大きく、1970 年代とほぼ同じ大きさでした。0.3-0.5 歳魚の平均体サイズは昨年よりやや小さかったのですが、乗船調査員の報告によると個体によるサイズのばらつきが大きかったとのことでした。

その他のさけ・ますの資源状態

2009 年夏季のベーリング海でのカラフトマス CPUE は 413.5 尾で、近年中最高でした（図 4 上）。ベーリング海に分布するカラフトマスの多くはロシアのカムチャッカ半島の東岸生まれのものです（高木ら 1982）。カラフトマスは通常 2 年で成熟し、東カムチャッカの奇数年生まれ群は偶数年生まれ群よりかなり多いのですが、2009 年では奇数年中でも特に多くベーリング海に分布していました。一方、ベニザケ *O. nerka* のベーリング海での CPUE は 16.3 尾で、近年中もっとも少なく、平均（40.3 尾）の 41%にとどまりました（図 4 下）。これは、ベニザケもサケと同様にカラフトマスとの競争の結果分布を変化させて、カラフトマスの多いベーリング海を避けたのかもしれませんが、その他のさけ・ます類（ギンザケ *O. kisutch*, マスノスケ *O. tshawytscha*, ニジマス（スチールヘッドトラウト）*O. mykiss*）の近年の資源水準は低いレベルにあります（図 5）。

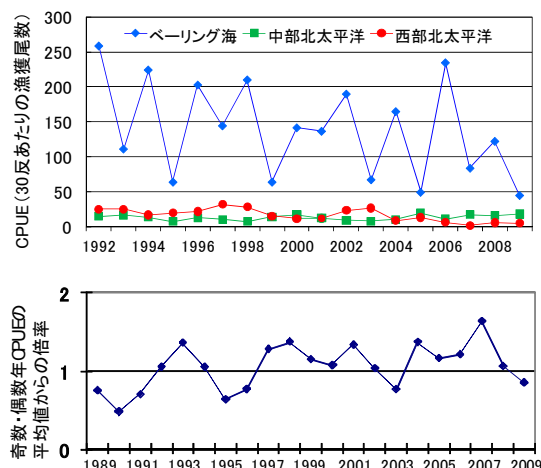


図 2. サケの夏季における北太平洋海域別サケの調査流し網30反あたり漁獲尾数（CPUE）（上）とベーリング海・中部北太平洋におけるサケCPUEの奇数年・偶数年平均値からの倍率（下）。

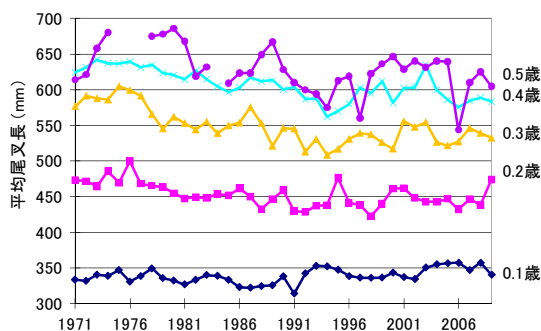


図 3. ベーリング海・中部北太平洋の夏季における調査流し網で漁獲されたサケの年齢別平均尾叉長。年齢はヨーロッパ方式*で表示。

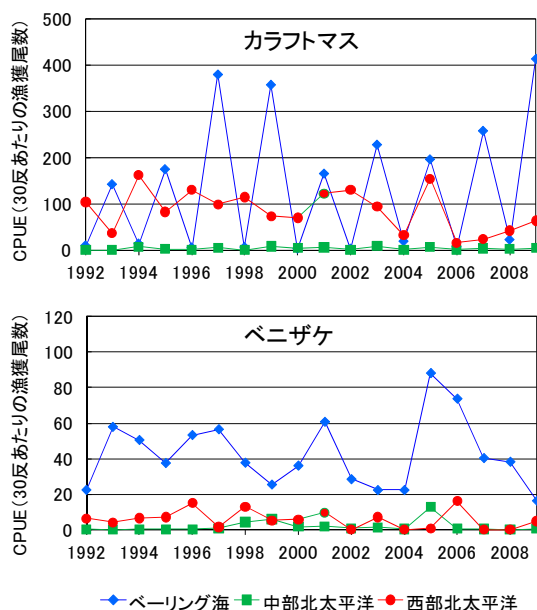


図 4. カラフトマス、ベニザケの夏季における北太平洋海域別の調査流し網 30 反あたり漁獲尾数（CPUE）。

*ヨーロッパ方式の年齢表示：ピリオドの前が浮上後の淡水中での越冬回数、後ろが海洋での越冬回数を示す。秋に帰した 4 年魚は 0.3 歳魚となる。

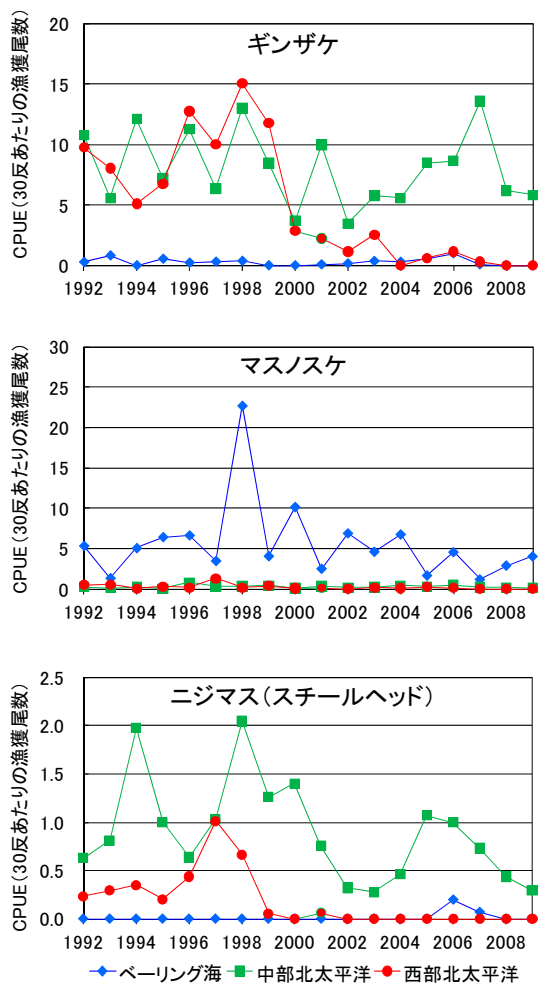


図5. ギンザケ、マスノスケ、ニジマスの夏季における北太平洋海域別の調査流し網 30 反あたり漁獲尾数 (CPUE)。

おわりに

水研センターは水産庁水産研究所時代から半世紀以上に渡って北太平洋沖合で流し網によるさけ・ます調査を継続してきました。長期間にわたる調査により、北太平洋のさけ・ますの資源状態を調べ、さけ・ますの国際資源管理に貢献してきました。しかしながら、公海漁業停止に伴い、水研センターによる沖合さけ・ます調査の目的は日本産サケの資源管理のための海洋生活史・資源状態の把握へと変化しました。また、公海漁業の停止により流し網調査船も徐々に減少してきました。そこで、水研センターは 2007 年から北光丸によ

りトロール網でのサケの調査をベーリング海などで実施しています。トロール網を使用することにより、米国 200 海里内などでも調査ができ、調査海域が広がると同時に 1 日あたりの操業回数も増え、より精密な調査が実施できるようになりました。今後は、沖合域調査結果を生かした日本産サケの回帰資源の評価手法の検討と同時に、北太平洋の生態系を考慮した資源管理方策なども検討する必要があります。

最後になりましたが、さけ・ます調査船の船長はじめ乗組員および調査員の皆様に感謝いたします。本稿の内容は Fukuwaka et al. (2009) により北太平洋溯河性魚類委員会に報告済みです。また、この調査は水産庁の国際資源動向要因分析調査事業として国からの補助を受けて実施しております。

引用文献

- Azumaya, T., and Y. Ishida. 2000. Density interactions between pink salmon (*Oncorhynchus gorbuscha*) and chum salmon (*O. keta*) and their possible effects on distribution and growth in the North Pacific Ocean and Bering Sea. N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull., 2: 165-174.
- Fukuwaka, M., T. Kaga, M. Sakai, and Y. Kamei. 2009. Salmon stock assessment in the North Pacific Ocean, 2009. NPAFC Doc. 1193. (Available at <http://www.npafc.org>).
- Neave, F.・米盛保・R. G. Bakkala. 1980. 北太平洋の沖合水域におけるシロザケの分布及び起源. INPFC 研報, 35: 1-72.
- 高木健治・K. V. アロー・A. C. ハート・M. B. デル. 1982. 北太平洋の沖合水域におけるカラフトマス (*Oncorhynchus gorbuscha*) の分布及び起源. INPFC 研報, 40: 1-178.
- 田中昌一・M. P. Shepard・H. T. Bilton. 1969. 鱸研究により決定した 1956-1958 年の北太平洋沖合水域におけるシロザケ (*Oncorhynchus keta*) の起源. INPFC 研報, 26: 53-144.
- 浦和茂彦. 2000. 日本系サケの回遊経路と今後の研究課題. さけ・ます資源管理センターニュース, 5: 3-9.